実践研究
私の保育ノート

「初めて」の一年を振り返って

石川綾子
（幼稚園教諭）

昨年度、私は初めてクラスを担任しました。年中を担任することが決まり、保育室の準備をしたり、子どもたちの名札を作ったりしながら、「どんな子どもたちと出会えるのだろう」「どんな一年になるのだろう」と、いろいろなことを想像していました。始まることが楽しみな一方で、「大丈夫かな」という漠然とした不安や緊張もどんどん大きくなっていきました。

そして迎えた入園式の日。同じように緊張した表情で、お父さん、お母さんと手をつないで保育室に入ってくる子どもたちと出会いました。一人ひとりとあいさつを交わしながら、「いよいよ始まるんだ」と、わくわくした気持ちでいっぱいになったことを今でもはっきりと覚えています。

毎日の生活の中には、迷いや戸惑い、困ったことや難しいと感じることがたくさんありました。うまくいかないと悩み、落ち込んだ日もありました。そんな時も、幼稚園を楽しみに登園してくる子どもたちに会うと、「今日はどんな一日になるだろう」と毎朝わくわくした新しい気持ちになります。そんなわくわくした気持ちと、生活を積み重ねることでできてきた子どもたちとの関係、一緒に過ごした大切な時間、心に残る子どもたちの小さなつぶやきが、いつも私を支えてくれていました。

石川綾子（いしかわりょうこ）
お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。

「あ、ぼくのせんせいだ」

幼稚園の生活が始まると、子どもたちはそれぞれ好きな遊びや、安心できる友達、落ち着ける場所を見つけて遊びだしていきました。私は、とにかく子どもたちのことを知りたいという思いで、不安そうな子に寄り添ったり、「せんせい」とそばに来る子と遊んだりしながらも、全員とかかわれるように幼稚園中あちこち動き回っていました。それでも、子どもたちがどこでどんなことをしているのか、すべて把握することは難しく、あまりかかわれないまま過ごしている子もいました。

そんな時、かかわりが少ないと感じていた男の子と園庭の隅で出会い、「あ、ぼくのせんせいだ」という声が聞こえました。入園式から数日しかたっていませんでしたが、この子の中に私が「先生」として居るんだ、私はこの子の先生なんだと、とてもうれしくなりました。子どもたちと出会い、「ぼくと先生」「わたしと先生」という一対一の関係を、一人ひとりと丁寧に積み重ねていく大切さを、この時教えてもらったように思います。

目には見えない関係

夏休みを迎えて一学期を振り返り、自分にとって大切な瞬間がたくさんあることに気がつきました。

入園から張り切って過ごしていた子が、本当は甘えたかった気持ちを表すようにおんぶしてきた日のこと。「せんせい」と、こっそり思いを伝えるように背中にもたれてきた子のこと。うれしい誕生会の日に、不安と緊張が混ざった表情で私を見る子と目が合い、にこっとほほ笑んだこと。友達とけんかをした子がぎゅっと握ってきた手から伝わってきた思い。見せたいものがある時に私の手を引っ張る子どもたちの笑顔。たくさん泣いたあと、そっとそばに来て思いを打ち明けた子のこと。

そこには、一学期の間に少しずつできてきた子ど

もたちとの関係があるようでうれしくなりました。少しほっとした夏休みの中で、子どもと過ごす時間が大好きな自分に気がつき、二学期が待ち遠しくなりました。

「せんせいはかわらない？」

二学期に入り、幼稚園の大規模改修が始まりました。四歳児（年中）の保育室の工事を行うため、九月末に、今まで過ごしてきた保育室から、五歳児の保育室へ引っ越しをすることになりました。

降園前の集まりでそのことを伝えた時の子どもたちの反応は、今でも忘れられません。保育室が変わることに対する不安や動揺を全身で表す人、わーっとなったクラスを鎮めようとする人、静かにいろいろ考えている人など……私自身、引っ越し後の生活があまり想像できず、不安な気持ちがあったので、この状況をどうすればいいのか、子どもたちの反応や姿をどう受けとめ、どんな言葉をかければいいのかわからなくなってしまいました。

それでも、だんだんと高まった気持ちは落ち着いていき、子どもたちは思ったこと、気がついたことを口にし始めました。「ねんちょうさんはどこにいくの？」「ひきだしはどうするの？」など、子どもたちの質問に答えていると、ある子が「せんせいはかわらない？」と不安そうな顔で聞いてきました。

この言葉を聞き、このメンバーで、この保育室で四月から生活してきたのだということを改めて思いました。子どもたちの中にも、これまで積み重ねてきた生活があり、それが変わってしまうのではないかという不安や戸惑い、何が変わって何が変わらないのかわからない思いが心の中にあるのだと感じました。保育室などの環境は変わっても、これまでの生活は何も変わらないという安心感の中で子どもたちが生活していけるよう、私自身がもっとしっかりしなければいけないと強く思う一日でした。

みんなで過ごす楽しい時間

降園前に、クラスみんなで過ごす時間があります。

絵本や紙芝居を読んだり、歌を歌ったり、ゲームをしたり。この集まりの時間は、一年間、私の中で大きな課題の一つでした。どうしたら「みんなで」「楽しく」過ごせるのか試行錯誤の毎日でしたが、みんなで過ごす楽しい時間、うれしい時間が、一年の間に少しずつ積み重なっていきました。

その時々の遊びや気持ちにぴったり合うお話を読んでいる時の、子どもたちの真剣なまなざし。面白い場面でみんなに広がっていく笑い。お気に入りの歌を歌う時の明るい声。

みんなが集まると楽しいことが始まるという期待が膨らみ、またやりたい、もっとやりたい気持ちが明日につながっていく。そんな子どもたちの姿を見て、降園前の焦ったりドタバタしたりする気持ちを少し横に置いておいて、「今日はどんなことをしようかな」と、楽しみな気持ちで子どもと向き合えるようになっていきました。

「初めて」の一年を振り返って

「担任の先生」として子どもたちと過ごした初めての一年。子どもたちにとっても、私にとっても「初めて」の年中の一年。毎日の遊びや生活も、いろいろな行事も、一緒に楽しむだけでなく、一緒に困ったり悩んだりもしながら過ごしてきたように思います。その中には、一人ひとりと関係ができていくうれしさと、みんなで楽しい時間を積み重ねていくうれしさがありました。二つのうれしさが重なり合い、この先もきっと忘れることのできない大切な時間やつぶやきにたくさん出会えたのだと思います。

これから先、どんな子どもたちと、どんな毎日が積み重なっていくのか。今日もわくわくした気持ちで子どもたちと出会いたいと思います。